

二〇一五年度 入学試験問題

経済学部A方式I日程・社会学部A方式I日程・現代福祉学部A方式

二 限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



○でかこまないこと。

枠外にはみださないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよこしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

〔1〕 近代に入ると、それまでの政治体系は、根本的に作り変えられることになる。中世で政治権力を持っていたのは、地方の荘園に住む封建領主、大司教のような宗教的指導者、ギルドのような商工業者の団体、等々であった。政治権力は、地域的に分散しているばかりでなく、軍事的／宗教的／経済的／文化的、等々のリーダーに分有されていた。こうした封建的な政治体制も、十四世紀のルネッサンス期あたりから変わり始める。政治の近代化といっても、ひとつの傾向性からなるものではなく、実は、対照的な二つの大きな流れを含んでいる。現時点にまで連なる政治的近代化のゴウテイは、対極に向う二つの運動が相互にカンショウを繰り返しながら進む、矛盾に満ちたものであった。

〔2〕 政治的近代化とは、まず第一に、社会の中に政治的な中心を作り上げようとする過程である。地域的に分散されていた権力は、「国家」という一点に集められる。宗教団体や経済団体などのさまざまな集団が持っていた武力や自治権は奪い取られ、「国家」へと集中される。暴力を正当に使うことのできるのは「国家」のみである。国家は暴力を独占すべきである。また「法」と呼ばれる一般原則によって人々に一定の行為を強制することができるのは、「国家」のみである。国家は法を作る権利（立法権）を独占すべきである。こうした考えの延長線上で、「国家」を唯一不可分で・絶対的な権力、すなわち「主権」の担い手と見なす近代的な国家観ができ上がる。

〔3〕 近代国家が手にオサめることのできた権力は莫大なものである。もしもさまざまなタイプの支配者の利用しうる権力の大きさを測ることができるとすれば、歴史上有名な偉大な専制君主、あるいは力に飢えた暴君といえども、近代国家にトツテキするような量の権力を自由にすることはできなかつたであろう。

〔4〕 近代国家のもつ膨大な権力は、合理的な官僚制組織を思い起こせば、容易にイメージすることができたらう。（合理的な）官僚制なしに大量の人々を効果的に統治することは不可能である。一定の目標を実現するためには体系的に遂行される行動を「管理」と呼べば、効率的な管理という点で、これまで存在してきた様々な統治形態の中で、近代の官僚制は最強の組

繼である。それは、決められた決定を、迅速かつ確實に、大量の人々に伝え守らせるばかりでなく、被治者のさまざまな要求に対して、規則に則しつつ、効果的に応答できる能力を持つ。官僚制は、巨大な機械のように被治者に君臨し、人々を巻き込み臣領する。

【5】 政治的近代化の第一の流れである「國家」形成の過程は、三つの面から特徴づけることができるだろう。それは①権力の集中が行われる中央集権化の過程であり、②政治が宗教や経済といった他の利害領域から分化し、機能的に自立する過程であり、③合理的な統治機構が作り上げられる官僚制化の過程である。

【6】 政治的近代化の第二の流れは、権力をあらゆる人々に^(イ)カイホウしていかうとする動きである。政治権力の正当性は、社会の構成員全員の合意に根拠づけられる。第二の動向は、民主主義的な政治体制を作り上げようとする、民主化の過程と呼ぶことができるだろう。あらゆる人々は、支配者の意向に関係なく、自由に考え、表現し、活動することのできる、生まれながらの権利を持つ。またあらゆる人々は、自由に政治活動を行い、政治に参加し、自分の考えに則して政治権力を作り変えることのできる、生まれながらの権利をもつ。こうした「権力からの自由」と「権力への自由」は、人間にとって根本的で、あらゆる政治権力が奪うことのできない絶対的な権利である。それは人間が人間であるための基本的条件、すなわち「基本的人権」と捉えられなければならない。

【7】 「人権」ということでイメージされていた人間は、当初、理任を持つ成人男子にかぎられていたが、次第に制限条件がゆるめられる傾向がある(女性、未成年の子供、障害者等々もまた、基本的人権を持つと考えられるようになった)。実際的にはともかく、原理的には、地球に暮らすすべての人々が、政治に参加し、権力の **A** (被治者) ではなしに、権力の主体(支配者)となるべきである。

【8】 國家形成の動きは、政治権力をかぎりなく集中化する。その極限は、すべての力を一点に集約した「主権」という概念に、^(ウ) テキに示されている。逆に、民主化の動きは、政治権力を限りなく **B** する。その極限は、すべての人々が「世界市民」として活動する状態である。國家権力の絶対化と人間の権利の絶対化とは、本来、真正面から衝突し合うはずであ

る。両者は、近代政治体系として一本化されるようなことは到底不可能な、相い矛盾する二つの傾向といえるだろう。

【9】 しかし国家形成と民主化とは、Cなものとして、「近代」の中に構造的に組み込まれてきた。こうした離れ業がともかくも可能であったのは、両者の間に、二つの原理を調停するような第三項があったからである。^①この媒介項こそナシヨナリズムに他ならない。

【10】 「ネーション」は三つの特徴をもつ。

① まず、それはひとつの共同体として想像される。国民の中にたとえ現実にはどんなに差別や不平等があるにせよ、国民は、常に、水平的で深い同志愛に基づき集團として、心に思い描かれる。人々がお互いに仲間と思うのは、言葉や宗教や習慣など、同一の文化を共有していると信じているからである。国民とは、なによりも文化によって作り上げられた共同組織のことである。

② 次に国民は、主権的なものと想像される。文化を共有する集團は、その文化の自己同一性を保持するために、共通の政治権力を確立するべきである。^②文化の単一不可分性は、その上部構造として、単一不可分な政治権力を要求するための必要・十分な条件と見なされる。国民は、自分たちのことを自分たちの手で決めることのできる「民族自決」権を持つべきである。この限りで国民とは、自らに固有な権力を獲得することを求め続ける政治的存在である。

③ 最後に国民は、領土的に限られた存在として想像される。国民は、ある限られた国境を持ち、その国境の向こうには別の国民が必ず存在している。どんな大きな国民でも、自らを人類全体と同一視することはない。国民は、領土的に限られた空間を占拠するものであるかぎりにおいて、多元的に併存し合っている。国民の範疇が大きくなり過ぎれば、民族問題が必ず持ち上がり、解体の危機に直面する。国民には、ある適正規模があり、大き過ぎても小さすぎてもトラブルが生ずる。

【11】 国民を構成する三つの特徴のうち、第一のものは民主主義に親和し、第二のものは国家形成に適合的である。事実、近代社会では、民主主義の担い手は、平等・友愛に満ちた「国民」に求められ、世界市民の理想は「国家市民」という限定された

形で初めて実現される。他方、国家は、「国民」を土台に、「国民—国家」として自己を表現する。「平等で、一体となったネーションの共同機関」という「国民—国家」のイメージは、民主化と国家形成という対極的動きが、国民観念を仲立ちとしていかにうまく調整されたのかを、鮮明に証し立ててくれる。

【12】 国民国家の内部構成に注目するかぎり、国民観念の調停能力はめざましい。しかし、国民国家同士の関係、すなわち国際関係に目を転じると、その帰結は破壊的である。というのは、国民は、本来孤立的で限定された存在であり、国民相互の関係を規範するような原理を一切含んでいないからである。あるとすれば、「弱肉強食」の論理だけである。一度築きあげたハケンも永続化することはありえない。大きくなり過ぎた国民は、必ず内部崩壊を招き寄せる。「後進の」国民が「先進の」国民に挑戦し、^(オ)権力ダツシエを企てる、という傾向をチェックする内在的な歯止めは存在しない。

【13】 国際関係を国家形成の論理で整理すれば、大帝国家(世界国家)の形成に至りつき、逆に民主化の動きを延長していけば連邦制に至りつき、いずれにしても安定的な平和の状態が制度化されよう。しかし民主主義が「国民民主主義」として実現されているかぎり、^(エ)戦争を恒常的に回避することは不可能である。

(厚東洋誌「モダニティの社会学」より。ただし原文の一部を変更してある。)

問一 傍線部(a)・(c)の語の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の1～5の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

(a) コウテイ

- 1 ギンコウの貸し出しが厳しい
- 2 工場内のコウテイの安全確認をする
- 3 物価のコウテイに影響される
- 4 その提案をコウテイする
- 5 サーカスのコウギョウを見る

(b) カンショウ

- 1 国境にカンショウ地帯を設ける
- 2 政府カンショウの保険に加入する
- 3 無名戦士の墓に詣でてカンショウにひたる
- 4 大國からのカンショウをはねのける
- 5 音楽カンショウを楽しむ

(c) オサめる

- 1 仕事オサめまであと三日だ
- 2 地方をオサめることは難しい
- 3 剣をオサめる箱はこれだ
- 4 学問をオサめる
- 5 神社にお札をオサめる

問二 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分にふさわしい漢字を、つぎの各群の1～10の中からそれぞれ二文字選び、その番号を解答欄にマークせよ。

(ア)	ヒツテキ	1	筆	2	質	3	必	4	陸	5	匹
(イ)	カイホウ	1	会	7	的	8	遠	9	敷	10	摘
(ウ)	タンテキ	1	単	2	耻	3	短	4	端	5	誕
(エ)	ハケン	1	派	7	的	8	適	9	拵	10	漬
(オ)	ダツシユ	1	脱	2	奪	3	出	4	達	5	徹
		6	就	7	取	8	手	9	修	10	趣
		6	検	7	健	8	道	9	験	10	権
		6	演	7	的	8	適	9	拵	10	漬

問三 傍線部①について最初に触れた段落は【1】から【13】のうちのどの段落か。該当する段落の番号を二つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11
- 12
- 13

問四 傍線部②の説明にふさわしくない記述はどれか。ふさわしくない記述の番号を一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 暴力を独占した国家にふさわしい組織である
- 2 合理的な規則をもつ組織である
- 3 一定の目標を実現するための体系的な行動を効率的に行う組織である
- 4 国民の要求に効果的に応答可能な組織である
- 5 基本的人権の行使を保障する組織である

問五 空欄

A

B

C

マークせよ。

の中に入るふさわしい語句を次の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄に

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|------|---|-----|---|-----|---|-----|
| A | 1 | 保持者 | 2 | 客体 | 3 | 担い手 | 4 | 受容者 | 5 | 分担者 |
| B | 1 | 分散化 | 2 | 絶対化 | 3 | 分配化 | 4 | 市場化 | 5 | 体系化 |
| C | 1 | 不思議 | 2 | 両立不能 | 3 | 融和的 | 4 | 相補的 | 5 | 補助的 |

問六 傍線部③のナショナリズムに触れた段落は【1】から【13】のうちのどの段落か。次の中から正しいものを一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- | | | | | |
|---|-----|------|------|------|
| 1 | 【1】 | 【9】 | 【10】 | 【13】 |
| 2 | 【1】 | 【9】 | 【10】 | 【11】 |
| 3 | 【1】 | 【9】 | 【10】 | 【11】 |
| 4 | 【8】 | 【9】 | 【10】 | 【11】 |
| 5 | 【9】 | 【10】 | 【11】 | 【13】 |

問七 傍線部④の記述について、誤っている説明すべてを選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 文化を共有する集団は国民であり、政治権力の確立要求集団として文化同一性が必要とされる。
- 2 単一不可分な政治権力を確立するために、文化の自己同一性が必要である。
- 3 文化の自己同一性を確立するためには、単一不可分な政治権力を確立する必要がある。
- 4 同一の文化を共有していれば、民族自決権が発生する。
- 5 国民は自らに固有の権力を求める政治的存在であるが、そうではなくても文化の同一性を共有することは可能である。

問八 傍線部⑤の理由はどこに求められるか。①②③のそれぞれについて、正しい場合はア、誤っている場合はイを解答欄にマークせよ。

- 1 国民観念の謂停能力は国家の内部崩壊を招くから。
- 2 国民という概念には国民相互の関係を規制する原理がないから。
- 3 民主主義の担い手たる国民には、世界市民の理想は限定されてしか実現できないから。
- 4 大帝国も連邦制も実現されていないから。
- 5 国民が平等・友愛に満ちているという定義そのものが現実を反映した正しいものでないから。

(二) つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

凝視は重い。負担を強いる。だからこそ、人は凝視からの解放の道をさぐってきた。しかし、凝視は「重さ」によって私たちを縛るだけではない。凝視する視線には独特のゆがみが生じている。

このゆがみは数値で表すことができる。次にあげるのは、ある割り算の結果である。見ての通り、ゼロの数がとても多い。

a 0.00000813(1:1,230,000) b 0.00002(1:50,000)

c 0.0007196315(1:13,896) d 0.00333(1:3,000)

括弧内に示したのは、割り算の元となった比例関係である。右の数字が示すものは次の通り。

a 村上春樹『1Q84』Book I 発行部数(二〇〇九年十一月十七日時点)

b 水村美苗『日本語が亡びるとき』発行部数(二〇〇九年二月頃)

c プログ「内田樹の研究室」訪問者数(二〇一〇年二月二〇日)

d 月刊誌「英語青年」発行部数(二〇〇七年)

これらの比例式は、一つの作品、もしくはサイト、もしくは雑誌に対してどれくらいの読者がついたかを示す指標である。通常、こうした数字は「部数」とか「訪問者数」といった数として示されるものだろう。ここではあえてそれを「 $\frac{1}{n}$ 」という数字との関係でとらえ、割り算を試してみた。そうすることで冒頭の数字は、見られる側を視点にすると、ひとりひとりの読者や訪問者が量の上でどのように見えるか、ということを示す数値となる。

私たちはしばしば、見る側と見られる側という対称関係を意識する。読む側と書く側、発信者と受信者……。こうした区別是我々が慣れ親しんだ思考のパターンでもあり、物事を整理して考える上では便利なものである。しかし、こうした思考パターンをとったときに抜け落ちてしまうものもある。

である。見る側と見られる側とは1:1という関係で対応しているとは限らない。いや、ほとんどの場合、両者の間にはかなりの不均衡が生じている。そしてその不均衡は、ときに、とて

つもなく大きなものとなる。しかし、私たちはふつうはその不均衡には目をつぶって、見る側と見られる側との間に、ほぼ対等のやり取りを想定する。村上春樹の『1Q84』が一〇〇万部売れたからと言って、この本を買って読んだ人がその一〇〇万分の一しか読めないわけでは決してない。この本の購入者にとっては、本と自分との関係はあくまで1:1なのである。だから本を手にするときには、お互い対等な^①なる者として向き合う。

しかし、ほんとうにそうなのだろうか。やはりひとつの作品を一〇〇万の読者が購入するというのは、それなりなことなのではないか。それが読む行為に影響してもおかしくないのではないか。にもかかわらず、つまり一〇〇万の読者がともにその作品を読んでいるにもかかわらず、自分がひとりで読んでいるような気になるということこそが、変なのではないか。そこには、見る側と見られる側とが対等でないにもかかわらず対等であるかのように見せねばならないような、何らかの事情が隠されているのではないか。

凝視からは様々な意味が生まれる。凝視の力みや真剣さには、記憶や、執念や、怨念や、場合によっては愛さえもがニユアンスとして伴う。そこには情念の香りがある。しかし、その一方で、凝視には強烈な知へのシコウも内在する。注意深く、冷静に、細かく見極める——凝視は集中力と正確さとを最高度にまで引き上げるような、究極の知の形を目指すものでもある。我々は凝視を通して、目の前の事物を対象として自らに従属させ、こちらが主導権を取る形で——主体的に——考察の材料とすることができ^②る。凝視によって我々は事物を支配するのである。そこには自由という感覚がガインイ^③されている。凝視によって我々は、知の自由さを謳歌する。(中略)

ここで注目したいのは、読むという行為である。読むとは、知の活動の中でもっとも基本的なものであり、あらゆる知的行動の土台となるもの。知のいわばインフラである。しかし、読むことをめぐっては、「匿名者が自由に行う活動」という知のイメージにそぐわないようなゆがみやねじれが伴う。対象と自分との関係についての錯覚が生まれるのである。まるで対象と自分とが、お互い入れ替え不可能な一対一の対称関係を作っているような錯覚である。このようなことが起きるのは、読むことを凝視的に、つまり集中力とともに鋭敏に深く行えば行うほど、対象と面と向かっているのが自分だけではないということを私

たちが忘却しがちだからである。

筆者に馴染みのある例をひとつ取り上げよう。先のリストに「英語青年」という雑誌があった。これはタイトルに表れている通り、英語圏の文学・文化に関心のある人を読者として想定したいわば業界雑誌だった。読者の多数をしめていたのは、英語関連の科目を教える高校や大学の教員である。この雑誌は二〇〇九年三月に紙媒体をやめ、以降は「Web英語青年」と名前を変えてオンライン化した。一八九八年の創刊というから、およそ一〇年の歴史。「朝日新聞」の報道によれば、紙媒体での最後の部数は三千部だったそうである。このところ雑誌の休刊は相次いでおり、「諸君」などの老舗ロングラン誌が相次いで休刊したのも記憶に新しいが、三千部という部数は、このような比較的限られた読者層を相手にした雑誌として多いのか、少ないのか。

休刊したからには、三千という数字は「英語青年」にとっては少なすぎたのだろう。しかし、ひとつの雑誌に三千という読者がいるのは、それほど「少ない」ことだろうか。誰かの書いた文章を少なくとも三千もの人間が読むかもしれないというのは、たいしたことではないだろうか。(中略)

三千という数字はおそらく、情報を発信する側と受信する側とが直接的な接点を持ちうる限界ではないだろうか。まさにひとつの村の規模であり、あるいは大きめの私立高校の生徒数であり、誰かの名前が出たときに「面識がある」といふにかかわらず——「ああ、その人ね。聞いたことがある」と普通に言っておかしくない程度の「見知り具合」の実現される場である。長谷川一は「出版と知のメディア論」の中で、「三千」という数字をめぐる出版業界のある「常識」を紹介している。明治以来の日本「読書人階級」はだいたい三千人程度によって構成されてきた、^① というのである。それが昭和以降の「知識階級」や「学歴エリート層」の核となっていく。三千という数字はどうやら、ひとつの「公」のユニットでありながら同時に「私」でもありうるというぎりぎりのバランスを可能にするものらしい。

(阿部公彦「文学をスクリプトする」より。ただし原文の一部を変更してある。)

問一 傍線部(ア)～(ウ)の語の漢字と同じ漢字を含む文を、つぎの各群の1～5の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- (ア) シコウ
- 1 武力をコウシする
 - 2 シコウのひとつ
 - 3 彼を委員にシメイする
 - 4 イシがかたい
 - 5 チンシモツコウする

- (イ) ガンイ
- 1 健康をキガンする
 - 2 あの人にはガンリキがある
 - 3 ガンコな性格
 - 4 犬をアイガンする
 - 5 ガンチクに富む文章

- (ウ) ロンダン
- 1 ダンテイ的な見方をする
 - 2 カダンに水を撒く
 - 3 ダンワを發表する
 - 4 劇はダイダンエンで終わった
 - 5 以前に比べカクダンに上達した

問二 空欄 に入る適切なものをも一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 関係性
- 2 客観性
- 3 真実
- 4 数の不均衡
- 5 対等性

問三 傍線部①の「独特のゆがみ」とは何か。適切なものをも一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 見る側と見られる側が対等であるという錯覚から生じるゆがみ
- 2 凝視されることよって感じる負担を意識しないことから生じるゆがみ
- 3 凝視することよって長時間見られている側が生じるゆがみ
- 4 凝視することは読むことであり、それは個人の活動であることから生じるゆがみ
- 5 情報を発信する側と受信する側は直接の接点がないために生じるゆがみ

問四 傍線部②の「 $\frac{1}{2}$ 」という数字とは何を示しているか。適切なものをも一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 本
- 2 作家
- 3 アーティスト
- 4 表現者
- 5 書かれたもの

問五 傍線部③の「凝視によって我々は事物を支配する」とはどういうことか。あてはまらないものをも一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

答欄にマークせよ。

- 1 集中力をもつて見つめることよって目の前の事物を個人の考察の材料とすることができること。
- 2 読むという行為によつて、対象と対一の関係になり、対等な「一」として向き合うこと。
- 3 知の自由さを謳歌することができ、対象と面と向かっているのは自分だけであると感ずること。
- 4 読む行為を通して自分一人で読んでいくことになること。
- 5 凝視することよって対象を自分のものにしてしまうこと。

問六 傍線部④「ひとつの公のユニットでありながら同時に私でもありうる」とはどういうことか。適切なものを一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 大きめの私立高校のように「見知らぬ人」がいないこと。
- 2 個人と個人がなんらかの接点をもちうる限界が三千という数であるということ。
- 3 三千という数では商業誌はなりたたないので公のものではないということ。
- 4 とてつもない不均衡が生じない社会であるということ。
- 5 凝視される個と凝視する個が対等な一つの単位であるということ。

問七 三千という数を筆者はどう考えているか。あてはまらないものを一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 「英語青年」の読者数。
- 2 明治以来の日本の読書人階級の数。
- 3 一つの雑誌の読者としては多い。
- 4 雑誌が廃刊になる限界の部数。
- 5 凝視による錯覚が生まれる数の限界。

問八 作者の述べていることにあてはまるものを二つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 凝視することにより、見る側と見られる側に対等であるという幻想が生まれる。
- 2 紙媒体の読者として三千人は限界であり、雑誌がオンライン化するのとは時代の趨勢である。
- 3 私たちが忘却しがちなのは読む行為で対象と面と向かった時1…1ではないということである。
- 4 ひとつの作品に三千以上の読者がいる時、それは読む行為に影響をあたえる。
- 5 読むという行為はあらゆる知的行動の土台であり、そこには必然的に凝視が伴う。

(三) つぎの文章を読んで、後の問いに答へよ。

日本近代のリアリズムを代表する一人が志賀直哉であるが、志賀直哉にあつてもリアリズムに内在する矛盾は何か問題なものと思はれてゐた。完全に意識されてゐたというよりは、なぜ問題なのか突きとめられないままに、半ば意識されてゐたといった方がいいかもしれない。ことはリアリズムは全体にかかわるのか、細部にかかわるのか、という疑問である。明治四十四年一月十日の「日記」に次のような記述がある。その最初の一文は特によく引用される箇所であるが、全体を通してみたととき、若い志賀直哉らしい直観的で不完全な言葉ながら、リアリズムの謎を語つてゐることが明らかだと思つた。

自分は總て物の Detail を解するけれど Whole を解する力は至つて弱い。

小説家としては Life の Detail を書いてゐるればいゝ、と自分は思つてゐるがホールが解からないと考へると一寸不快でもある。ケレドモ、自分にはホールは解かるものではないといふ考へもある。

Detail は真理であるがホールは誤ビヨオを多く含むと思ふ。

又かうも思ふ、今からホールが解かる、或はホールに或る概念を易く作り得るやうになる事は結局自己の進歩を止まらせはしまいかと。

兎も角今は Life の Detail を正確に見得る事を望む。

これが書かれた時点は「白樺」創刊の翌年にあたり、小説ではまだ「網定まで」「剃刀」などが発表された程度で、作家の地位は完全に確立されてはゐなかつた。その点でこの内容にどれだけ価値を認めうるかを問うこともできるが、公平にみて志賀直哉のリアリズム批判として重要な点と思ふ。全体が分らない、しかし細部は把握できるといふのを、志賀直哉は自分一箇の個人的資質、才能の問題と思ひこんでゐるが、実はそれはリアリズム本来の問題点で、そこに直観的に感応したのは彼のリアリズム

が既に本格的になつていたからである。

全体を捉えなければならぬ、「視力」は普遍性、總体性と結びつかなければならぬ——こういう要請を外してしまえば、「視力」は本来ものに直達し、細い矢が的に突き刺さるようにもに衝突し、ものに食いこむものであり、細部としか結びつかないのである。極端になれば衝突した一点である「極点」に凝集しようとする傾きさえもっている。言い直せば、「視力」には二種類あるということになる。ものに向う視力と、状況(全体)を把握しようとする視力と。そしてリアリズムは前者から発生するのに対し、後者からは判断、思考、方向づけ、予備、行動などがあらわれる。十九世紀のリアリズムはその二つを統一しようとしたところが特異だったといえるだろう。社会という觀念の拡大、「一見」はたらしきの重視という近代の条件が近代リアリズムに新しい方向を与え、それまで定数として歴史の中に生きてきた部分のリアリズムからはみだしていったことには、それなりの理由があつたといえる。近代リアリズムの完成は、リアリズムの変質によつて可能であつた。

近代リアリズム以後、それを基本的にケイショウしたのが全体小説とか社会主義リアリズムとかの立場であつた——このように大よそのミトリ図を描くことができるし、一方、変質ないし拡大から引き続いて生じた近代リアリズムの余震のようなものとして、内的リアリズム、幻想的リアリズムのたぐい、それにシュールレアリズムが挙げられるだろう。今日、幻想文学、SF小説は人気盛んであり、意気も揚つてゐるから、それらの立場によつて立つ人々はリアリズムなどには何のかわりもないという顔をしている。文学書肆などでも、古くさく何の魅力もない過去の文学思潮として、はじめからリアリズムは問題の枠から外されてしまうことも多い。それにもかかわらずそれらリアリズムを克服、無視した筈の文学の中にリアリズムが依然として存在している。怪奇幻想文学が怪奇や恐怖を表現するときの誇張され、濃密化された細密描写というのは、部分のリアリズムの技術的拡大に他ならない。シュールレアリスム絵画が一つの人物、一つの器物には極度にサイチナリアリズムを適用して、全体としては超現実の世界を提示しているのを思い合せてみてもよいだろう。あるいは、光のクツセツ率の異なる幾種類ものレンズをはめこみ式に組合せて画面を幾つかの小部分に分割したとき、それぞれの小画面は一つ一つリアリズムでありながら、全体は多次元のリアリズムの合成、並存となつてゐるのを思い描いてもよい。この場合リアリズムは、全体が何を意味

し、何をめざしているかは全く解決できない筈だ。しかし部分のリアリズムがなければ、こういう複合的な全体はそもそも構成されようもなかった。そんな関係がリアリズムとリアリズム以後の諸潮流のあいだにも想定できると思われる。

(高橋英夫『志賀直哉 見ることの神話学』より。ただし、原文の一部を変更してある。)

問一 傍線部(ア)～(エ)の語のカタカナ部分にふさわしい漢字をつぎの各群の1～8の中からそれぞれ二文字選び、その番号を解答欄にマークせよ。

(ア)	ケイショウ	1	系	2	形	3	性	4	継
		5	生	6	象	7	景	8	承
(イ)	ミトリ	1	観	2	取	3	録	4	身
		5	見	6	鳥	7	採	8	看
(ウ)	サイチ	1	知	2	紐	3	智	4	致
		5	才	6	綴	7	最	8	彩
(エ)	クツセツ	1	掘	2	切	3	折	4	屈
		5	節	6	撰	7	苦	8	接

問一 傍線部①「志賀直哉によってもリアリズムに内在する矛盾は何か問題的なものと意識されていた」の説明として不適切なものを、つぎの1～5のなかから一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 LINEの細部を見落とすことによつて、間違つた全体へとたどり着いてしまうというリアリズムが持つ本来の問題点をすでに意識していた。

2 部分は把握できるが全体はわからないといういまだ直観的で不完全な方々にはあるが、部分と全体にかかぬリアリズムの本来の矛盾をすでに意識していた。

3、先に全体があつて、それを支える細部を集めようとするので、誤つた方向へと結論が導かれてしまうというリアリズム本来の危険性をすでに意識していた。

4 全体から細部へ、細部から全体へと視点の転換が自在に行われることが、正しい結論を得るために必須であることを、不完全な方々にはあるが意識していた。

5 部分は理解できても、全体を把握することができないということを、自己の資質の問題として不快感を持つて意識していた。

問二 傍線部②「リアリズム」の内容と合致するものを、つぎの1～6のなかから二つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 ものに向う視力から発生した近代のリアリズム

2 近代の合理主義から導かれたリアリズム

3 見るはたらきを重視した近代のリアリズム

4 時に極点に凝集しようとする部分のリアリズム

5 見たものそのものを客観的に描写する写實的リアリズム

6 怪奇幻想文学にみられる細密描写のリアリズム

問四

傍線部③「それらリアリズムを克服、無視した筈の文学の中にリアリズムが依然として存在している」の内容と最も一致する文章を、つぎの1～5のなかから一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 ものに向う視方と全体を把握しようとする視方の統合によって完成された近代リアリズムは、これとは無関係に見える幻想文学やSF小説の中に、全体のリアリズムとして依然として存在している。

2 幻想文学のように、あり得ない世界をあたかも存在するかのように見せるリアリズムの技法は、現実の世界を客観的に描写する近代リアリズムにおいて完成していた。

3 細部を細密に描きながら、全体として超現実の世界を提示するシュールレアリズム絵画が例示するように、細密に描く部分のリアリズムがなければ、そもそも複合的な全体は構成されようもない。

4 定数として歴史の中に生きてきた部分のリアリズムは、社会という觀念の拡大や「見る」はたらきの重視という近代の条件を通して全体のリアリズムへと変質し、その後も幻想文学やSF文学の中に完成された全体のリアリズムとして存在し続けている。

5 リアリズムは全体にかかわるのか、部分にかかわるのかという矛盾は、リアリズムを克服した幻想文学やSF小説の中にもはや存在せず、論理性の破たんとして存在している。

問五 本文の内容に合致するものを、つぎの1-5のなかから二つを選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 目の前にあるものを見た通りに客観的に描くところにしか、リアリズムは存在しない。従って、シェールリアリズムはいかなる意味でもリアリズムではない。

2 近代リアリズムは、普遍性、総体性という特性を持っており、それゆえにそれまで定数として歴史の中に生きてきた部分のリアリズムからはみだすこととなった。

3 細部は把握できるが全体を解することができないという志賀直哉の言葉は、直観的で不完全ではあるが、リアリズムの問題点を言い当てている。

4 リアリズムは、目の前にあるものをありのままに、客観的に写しとることによって成立するのだから、合理主義や科学が発達する十九世紀以前には存在しなかった。

5 極点に凝集しようとする近代以前の「視力」は徐々にその価値を失い、近代において、判断、思考、予測といった合理的な「視力」に呑み込まれていった。

問六 つぎの文章を読んで、空欄（ア）～（ウ）に入る適切な人名をA群の1～6から、空欄（a）～（b）に入る適切な語句をB群の1～6からそれぞれ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

島崎藤村や（ア）らに代表される（a）主義が退潮期をむかえると、これに代る文学の潮流として白樺派が台頭する。白樺派は、（b）運動を實踐した（イ）や白樺派のリアリズムを代表する志賀直哉、そして（ウ）らが中心となって活躍し、やがて大正前期の文学界の主流となる。

- | | | | | | | | | |
|----|---|------|---|--------|---|-------|---|------|
| A群 | 1 | 森鷗外 | 2 | 武者小路実篤 | 3 | 谷崎潤一郎 | 4 | 田山花袋 |
| | 5 | 夏目漱石 | 6 | 有島武郎 | | | | |
| B群 | 1 | 反自然 | 2 | 耽美 | 3 | 新しき村 | 4 | 自然 |
| | 5 | 新現実 | 6 | 現実 | | | | |